

静岡県博物館協会会報

No. 80

静冈の博物館



ふじのくに茶の都ミュージアムの日本庭園と茶室

静岡県博物館協会

平成29年度 第1回講習会 西部地域館の視察

日時：平成29年10月18日（水） 10:00～16:30

参加者：22名

場所・内容：浜松市地域遺産センター（浜松市美術館収蔵庫、浜松市地域遺産センター開館記念特別展「戦国の井伊谷」）、浜松市秋野不矩美術館（企画展「浜松市美術館コレクション選」）

平成29年度、浜松市を舞台とした大河ドラマ「おんな城主直虎」が放送されたことにより、伊井谷をはじめとする地域が一躍脚光を浴びることとなった。そのうねりは「直虎ブーム」とどまらず、県内外の多くの人々が浜松市の歴史や文化に興味を持ち、新たに学ぶきっかけとなったのは確かだと思われる。第1回の講習会では、浜松市に新たに開設した浜松市地域遺産センターと隣接する浜松市美術館引佐収蔵庫、秋野不矩美術館への視察を行なった。既存施設の活用や新しい映像技術を使った展示、最近注目の「フォトジェニックな」建築施設をまわり、今後の館運営について意見交換を交えながら学んでいった。

地域遺産センターは、文化財をはじめとする地域遺産の調査や保護、活用を行うことを目的とした施設である。既存の公共施設をリニューアルし、2017年にオープンした。プロジェクションマッピングや3D映像など、新しい技術を活用した展示を行なっている。来館時は井伊直虎の生涯や戦国時代の井伊谷周辺の様子について展示が行なわれており、同センター職員・鈴木氏の解説のもと、見学を行なった。

続けて浜松市美術館引佐収蔵庫では、収蔵庫内部やトラックヤードを建設に携わった同館職員・鈴木氏と共に見学した。同美術館は現在改修工事を行なっており、期間中全所蔵品を当収蔵庫で保管している。こちらも既存施設をリニューアルした収蔵庫であることから、空調や温湿度の管理方法や施工時の様子などについて質問があがった。

秋野不矩美術館は、浜松市出身の画家・秋野不矩の偉業を顕彰するとともに、地域の芸術文化の振興を図るため平成10年4月に開館した。木材と漆喰を使った建物の設計は建築家・藤森照信氏によるもので、靴を脱いで鑑賞する、ユニークな趣向となっている。浜松市美術館の所蔵品約7,000点の中から、日本近現代絵画の名品を紹介する展覧会を秋野不矩美術館で開催しており、施設見学と併せて鑑賞した。「フォトジェニック」との言葉通り、当日も撮影のため来館した外国人もみられた。

これら3施設の視察を通じ、浜松市における公共施設の管理運営や資料展示の様子などを詳細に伺うことができた。また、様々な館園の皆さまのご参加により各館園での取り組みや共通する課題について、情

報交換を行う貴重な機会となった。ご協力をいただきました皆様に、この場を借り御礼申し上げたい。

(浜松市博物館・佐野聖子、浜松市美術館・水野歩美)



浜松市美術館収蔵庫ガレージ



浜松市地域遺産センター



浜松市秋野不矩美術館

平成29年度 第2回講習会 友の会、ボランティアなどの活動について

日 時：平成30年2月15日（木）13：00～16：00

会 場：静岡県立美術館 講座室

参加者：30名

内 容：

報告「佐野美術館のボランティア制度」深沢香奈氏（佐野美術館）

報告「“人から人へ”地域の宝を伝えるボランティア活動」益田ちづる氏（静岡市立登呂博物館）

報告「“ミュージアムサポーター”制度」鈴木啓和氏（ふじのくに地球環境史ミュージアム）

質疑応答

博物館館活動を展開していく中で、市民の方々のサポートは、大きな力である。それはしばしば、ボランティアや友の会、NPO等の形を取り、館園の運営に携わって下さる。これら貴重な戦力と施設の運営者は連携を密にして、活動を進めていく必要がある。今回の講習会では、3つの館園にお願いし、サポーターが実施している活動について、主に運営側の視点から、人材確保、育成、継続についての事例発表を頂いた。

佐野美術館の場合、職員10名の内、4名がボランティアに係る業務を分担しておられるとのことである。2001年に解説ボランティアが創設されたことから、同館の様々なボランティア組織が始まったという。現在は他に隆泉苑掃美、館内サービス、教育普及、また展覧会行事に即したイレギュラーなものがあり、多様な活動を展開している。館の園地である隆泉園の日本家屋を掃除する、隆泉苑掃美ボランティアは、高齢化が問題になったことがあるが、幸い、還暦になったばかりの瑞々しい年代の方々が参加され、事無きを得たそうである。館内サービスの方々は、展示室内で活動し、お客様や作品の安全確保に当たる。ボランティアによる活動なので、不在の日には常勤職員がその穴を生めるとのこと。教育普及では、受付や実施、アンケートの集計等、当該イベントの全般にわたって補助を行うとのことである。イレギュラーなものとしては、協約校学生ボランティアが挙げられた。佐野美術館では、学校から協約金を貰うことで、学生や両親を無料にしているが、その学校からの学生をボランティアとして受け入れ、展示室案内を頼むことがあるのだという。また、ボランティアがイベントの講師を務めることもあり、聞香や消しゴム版画等の講座に実績があるという。

これらの活動は、小規模館にとって大きな力になっているが、反面、個人の経験等で能力に差があり、お客様からお叱りを賜ることもあるそうである（監視に当たる方が展示室で寝てしまったり、とか）。

登呂博物館のボランティア組織は、1995（平成7）年から募集を始めたもの。解説、体験の補助を通じて、登呂遺跡や弥生時代についての来館者の理解を深めると共に、ボランティア自身の成長及びボランティア相互の交流や研鑽を図るのが目的だという。2017（平成29）年度は概ね45名が在籍、毎年四分の一程度の方が登録を更新する。年齢層は60代以上が中心とのこと。資格は月3回ほどの活動が可能で、健康であり、事前研修を受講出来ること。年齢は高校生以上なので、部活動での参加もあるという。班別に分かれており、お客様の体験補助、展示室等での解説、学校団体への対応、講座やイベントの補助が主な業務内容で、他に自主的な活動グループが、土器づくりや機織、みごほうき（稲藁から作る箒）づくり、活動フォト通信、大豆・小豆栽培等に当たっているという。

ご報告を頂いた館園の中で、開館が2016（平成28）年と最も新しい、ふじのくに地球環境史ミュージアムでは、開館以前からNPO 静岡県自然史博物館ネットワークが活動を継続している。また、この館では

「ボランティア」ではなく、ミュージアムと一緒に作る人という意味を込めて、「サポーター」という呼称の元に、様々な活動に当たる方々がいる。今のところグループ分けはしていないそうだが、ガイドツアー、標本資料作成、館内外整備、教育普及活動、館内イベント実施、自然観察路ガイドツアー、キッズルーム対応、チラシ袋詰め、チラシ街頭配布、企画展示補助、百年カードのデータ処理、等々、非常に多くの業務を職員と共に担っている。館の成り立ちから云っても、「サポーターがいないと館運営に支障が出る」という実感をお持ちであった。やはり半分が60代以上、全体で85名くらいの方々が、募集や登録の更新を経て、活動している。

今回、報告のあった3館に共通していたのは、ボランティアやサポーターとの連携を密にし、モチベーションの維持を図るための努力であった。

登呂博物館であれば、連絡会と呼ばれる月1回の全体会議の後、ボランティアにのみ向けた研修会を開催、県内外にある他施設の見学会で、他館のボランティアとの交流も図られている。9時30分からの活動前には、ボランティアと職員、体験指導員でミーティングを行ない、ここで日々のノウハウ等も伝授されるという。

ふじのくに地球環境史ミュージアムでも、シフトに合わせてサポーターとの打合せがあり、「これが無いとサポーターと噛み合わなかった」そうである。こちらでもミュージアム学習会として、毎月1回60分程度の研修機会を設ける他、研究員の送別会兼忘年会にもサポーターが参加し、親睦を図るといふ。

佐野美術館の場合、「ボランティアさん達の顔とお名前は最低覚えます」と話しておられたのが印象的であった。

今回の講習会は、単なる組織の運営や仕組みの勉強だけではなく、市民からのサポートを受け入れ、関係を血の通ったものにするためには、やはり相応の努力が必要であることを、学ぶ機会になったのではないだろうか。

(事務局・静岡県立美術館 新田建史)

